The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	研究例会報告
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 1966, 5, p. 81-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52525
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第 27 回 研 究 例 会

41年5月14日　於・京都工芸繊維大学

研究例会

「デトロイトのフォード・ミュージアム」

京都工芸繊維大学　　柳　原　明　彦

「ニューヨーク・ワールド・フェアーみてあるき」

ＫＫ日展　　神　吉　　定

柳原氏はデザインについて、昔からうけつがれてきた歴史の重さがきわめて重要でありながら、一般には軽視されがちである。デザイナーは、現在、将来に眼を開くことは当然であるが、そのためには過去を知るべきでありながら、殆んど無視している。」との論旨にそって、アメリカでの体験として、デトロイトのフォード美術館を紹介されながら、このような美術館の成立根拠を示された。

神吉氏はスライドを用いて、ニューヨーク・ワールド・フェアを紹介されたが、とくに光のディスプレーのすぐれた点を強調された。大阪万国博も決定した今日、それへの参考の資として貴重な発表であった。

第 28 回 研 究 例 会

6月18日　トヨタ自動車工場見学　　愛知県豊田市
豊田一番地
トヨタ自動車KK

連日の欝陶しい梅雨空も、この日は学会として始めての見学会の壮途を祝してか、晴天で気温も本年度最高の30.2度とかの快晴。

午前9時20分、参加人員61名(2名欠席)。近鉄観光バスにて、京都駅をあとに名神高速道路で一路豊田市へ…。車中より緑の山々や田植風景を眺めつゝ途中、多賀バスストップで休息。次いで関ケ原、岐阜をへて名古屋に入る。その間バスガイド嬢の名所旧蹟の話をきゝつゝ12時15分目的のトヨタ自動車工場着、早速昼食をご馳走になり、東京の会員3名と合流、午後1時よりPR映画で工場の概要を説明され、1時40分より元町工場見学。主として、プレス工場と組立工場で近代自動車工業の設備・生産方式と眼のあたりに見て、各自会員とも違った専攻分野でありながら夫々、感銘を新らたにした。見学を終って3時より約40分間トヨタ自動車第1技術部次長森本真佐男氏の『自動車のデザイン』についての簡単な講話があり、続いて、会員との質疑応答が熱心に続けられたが時間の都合で3時40分終了。技術部の方々の厚意を謝して帰途についた。

途中、名古屋で5名下車、養老バスストップで一休みし定刻7時京都駅着、有意義な見学会を無事終了し解散した。

今回の見学会は初回でもあり、かつ長距離であるため、その成果が案ぜられていたが、岡山・神戸・河内・奈良など遠方からの会員の参加もあり、却って余り例会に顔をみない会員とも親しく話す機会ともなって、バスの車中は和気靄々であり工場見学の成果もさることながら、初回としては成功であったと思われる。今後も予算の許される範囲で是非続けてゆきたいものと思う。

第 29 回 研 究 例 会

7月23日　　於・神戸六甲荘

研究例会

「19世紀末の装飾性について」

神戸大学　　大　西　範　明

まず同氏は「装飾性」とは、いわゆる「かざり」としての意味ではなく、むしろ「造形性」としての意味であることをことわられた。今日「色と形のシンボル化」といわれており、また、そのことと、現代芸術はつながりをもつ。抽象的理念の具体化が「文字の世界から影像の世界へと向けられている」。このような傾向は、すでに19世紀後半から積極的にとりあげられてきた。いわば、現代の造形性の源として、19世紀末の装飾性をあげることができる。19世紀の美術の流れに、それらは見られるし、文学における詩の象徴主義ともつながりをもつ。かくして、アール・ヌーボー（新しい芸術）において、明確な一頂点に至っている。以上の論旨をきわめて、精細な事実指摘を行いながらの発表であった。19世紀の芸術を考える場合、19世紀初頭の「芸術のための芸術（I′art pour I′art）との聯関をも考慮すべきではなかろうか。

研究発表会終了後懇親会がもたれ、30数名の参加者によって、和やかな雰囲気がかもし出された。

被服部会研究例会

第７回研究例会

日時　昭和40年12月11日（土）　　於・京都女子大学

「女性を中心とした欧米のデザイン」

兵庫工高　　南　原　七　郎

昭和40年７月に開催された関西意匠学会研究例会において、南原氏は「欧米よりみた日本のデザイン」について、研究発表をなされたが、その豊富なご見聞のうち、この度は、被服部会で女性を中心としたデザインの、お話をお願いした。

まず、生活上のデザインが、日本において感ずるものと、根本的に差のあることを指摘された。それは、キリスト教による社会秩序が、社会習慣をつくり、大きい支配力をもって彼等を律しており、その、キリスト教の愛の精神が、デザインの中に浸透しているためではないか、との説明があった。後半、数多くのスライドにより、ローマ・ベニス・パリーの風景と女性の服装、市民の住居の内部、アパートの内部、各地のショーウインド、商店の服、手芸品、インテリアーテキスタイル、レースデザイン等をみせていたゞいた。

第８回研究例会

日時　昭和41年６月11日（土）　　於・京都女子大学

「丹波布について」

永元寺住職　　金　子　貫　道

「被服構成の問題点」

京都女子大学　　土　井　幸　代

無形文化財・丹波布染織指導をしておられる金子氏から、丹波布についての講演をしていたゞいた。丹波布は、従来縞貫（しまぬき）とよんでいるが、佐治

木綿、或は、丹波木綿ともよばれたことがある。農家の者が、農閑期に山から染料を取って染め、自家用の野良着として織ったのに始まり、その特徴は(1)経緯共に手紡ぎの綿糸である、(2)染色は全部草木染である、(3)織機は手機を用う、(4)緯に必ずつまみ糸を用うものである。尚、或る時代には、佐治間道と称されて茶人の間に珍重されたこともあるという。

実物資料を多く提示していたゞいて、丹波布に対する認識を、新たにすると共に、その技術保存を痛切に感じた。

土井氏は、被服の構成が技術を主体として習慣化してしまい、理論的に被服を究明しようとする努力の、欠けていることを指摘され、被服構成の問題点として次の事を挙げられた。(1)人体計測の問題、(2)動作分析と動作特性把握の問題、(3)美的表現の具体的な方法の問題、(4)1・2・3項で解明されたものゝ、作図への展開方法の問題、(5)布性能の究明に関する問題、(6)縫製加工の問題、(7)量産のための標準化、並びに普遍化の問題、(8)着装に関する問題、習慣的、模倣的な考えから、人体と被服との関連をいかに秩序的に見いだすべきか、そこに芸術的表現をいかに加味すべきか等、被服構成の科学的な体系づけの必要性を強調された。

洋画材料
額縁
製図器具
図案材料
大地堂
京都市上京区河原町今出川東南角　TEL. 23－8008